

日本における食事パターンと大腸がん罹患リスクとの関連：大崎国保コホート研究

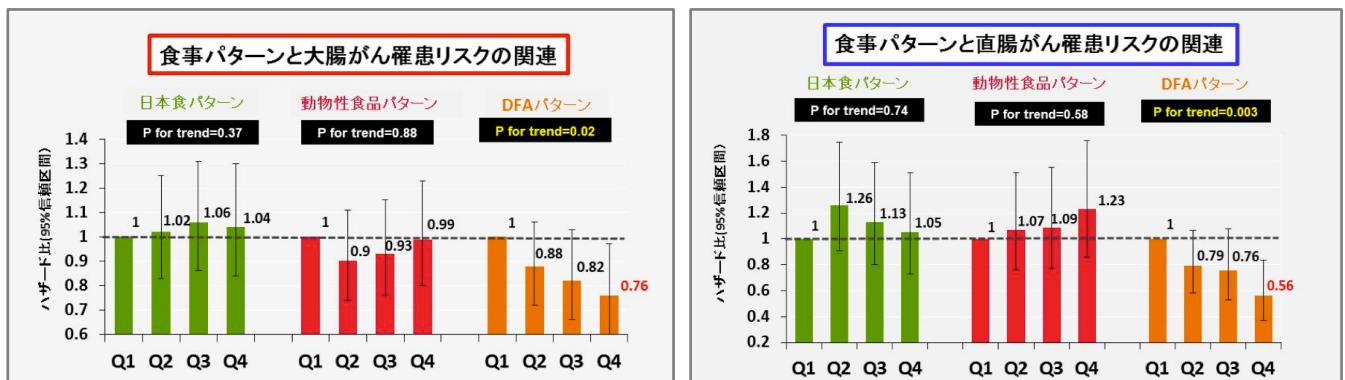
Dietary patterns and colorectal cancer risk in Japan: the Ohsaki Cohort Study
2014 年 Cancer Causes and Control 発表

DFA パターンの度合いが高い人では大腸がん罹患リスクが低い

先行研究により、大腸がんの罹患には食事要因が重要な因子であると報告されています。欧米における食事パターンに関する先行研究をまとめると、野菜果物パターン（野菜、果物、食物繊維）、低脂肪食パターンは大腸がん罹患リスクを下げ、動物性食パターン（赤肉、加工肉、飲酒）はリスクを上げることが示されていました。しかし、日本では食事パターンと大腸がん罹患リスクについての先行研究は数少なく、結論はまだ出ていませんでした。そこで、私たちは大崎コホートのデータを解析して、日本における食事パターンと大腸がん罹患リスクについての関連を検討してみました。

食物の摂取頻度に関する 40 項目の質問への回答から、日本人での主要な食事パターンとして「日本食パターン」「動物性食品パターン」「DFA（高乳製品・高野菜果物・低飲酒）パターン」の 3 つを統計学的手法（因子分析）を用いて抽出しました。日本食パターンは、野菜・果物・魚・大豆製品、動物性食品パターンは肉類・脂肪性食品・アルコール摂取との関連が強い食事パターンでした。それぞれの食事パターンを摂る度合いを点数化し、最も低いグループ（Q1）から高いグループ（Q4）まで四分位によって 4 グループに分け大腸がん罹患リスクとの関連を検討しました。

その結果、DFA パターンの度合いが最も低いグループと比較し、最も高いグループでは大腸がん罹患リスクが有意に低下していました。部位別にみた場合、DFA パターンでは直腸がん罹患リスクの有意な低下をみとめました。一方、日本食パターン、動物性食品パターンは大腸がん罹患リスクとは、有意な関連はみられませんでした。



研究のデータについて

ベースライン調査：1994 年 10 月から 12 月に宮城県大崎保健所管内に居住する 40～79 歳の国民健康保険の加入者約 5 万 5000 人を対象に生活習慣に関する自己記入式アンケートを配布し、5 万 2029 人から有効回答を得ました。回答率は 95% です。生活習慣に関する調査内容は、病気の既往歴と家族歴、体型に関することなどの健康状態、運動習慣、喫煙、飲酒、食事などの生活習慣、職業、婚姻状況、学歴などの社会的な状況から構成されています。

追跡調査：ベースライン調査に答えて頂いた方のうち、追跡開始以前に国民健康保険から脱退した方、今回の研究に関連する質問への回答に不備のあった方、がんの既往歴のある方を分析の対象から除いた 4 万 4097 人を対象に追跡を行いました。ベースライン調査時から 2005 年 12 月 31 日までの 11 年間の追跡期間中、宮城県がん登録との照合により大腸がん罹患患者 854 例を確認しました。

他のリスク要因の影響について

この研究では、食事パターンと大腸がん罹患に関連すると考えられている要因の影響を考慮して結果を算出しています。具体的には、年齢、性別、BMI、喫煙、歩行時間、学歴、総エネルギー摂取量、大腸がん家族歴といった要因についてグループ間に偏りがないように、統計学的方法で調整しました。

研究の特徴と限界について

この研究の長所としては、（１）一般市民を長期間にわたって前向きに追跡している点、（２）宮城県がん登録という日本の中でも精度の高いがん登録からがん罹患を把握している点が挙げられます。

一方限界としては、（１）服薬歴（アスピリンなど非ステロイド性抗炎症薬など）について調査されていない点、（２）食材の準備や調理法などについては調査されていないことがあげられます。
